

P-173

肺癌診断および縦隔リンパ節転移診断におけるTBAC (transbronchial aspiration cytology) の有用性についての検討

東京慈恵会医科大学青戸病院内科

○土屋昌史、四方千裕、江島正顕、望月正武

【目的】気管支鏡下のTBACの有用性を検討する。

【対象・方法】1993年以降、当科にて原発性肺癌に対して気管支鏡下にTBACを21例に施行した。原発巣に対して行った10例、気管分岐部リンパ節に対して行った11例。(症例の重なりはない)診断は小細胞癌4例、腺癌12例、扁平上皮癌3例、組織型不明1例、診断未確定1例である。

【結果】気管分岐部へのTBACは11例中7例において陽性所見が得られたが、陽性所見を呈した症例の胸部CTでの気管分岐部リンパ節径は10-19mm 1例、20-29mm 2例、30mm以上3例であり、20mmを越える例では全て陽性であった。組織型では腺癌が陽性率が低かったが、これはリンパ節径が小さい例が多かったためと考えられた。臨床病期では陽性率に差は認められなかった。病巣へのTBACは10例中6例で陽性であった。このうち2例はTBLBでは陰性で、TBACのみ陽性であったが、これは2例とも左S¹⁺²に腫瘍が存在し圧排性増殖をしており誘導気管支に鉗子が入りにくいためと考えられた。

【結語】気管支鏡下のTBACは肺癌診断および縦隔リンパ節転移の診断において有用性が高いものと考えられた。

P-175 肺癌との鑑別を要した限局型器質化肺炎の5例

榛原総合病院呼吸器内科¹呼吸器外科²

浜松医科大学第二内科³

○小田三郎¹ 岩田政敏¹ 中村祐太郎¹
堀口倫博² 大井 諭² 佐藤 篤彦³

【目的】肺癌との鑑別が困難であった限局型器質化肺炎を臨床的に検討した。

【対象】1992年7月から1995年7月までの胸部X線上肺野孤立性陰影を呈した症例で、TBBが施行され、最終臨床診断が器質化肺炎とされた5症例(男3・女2/平均年齢59.2歳)を対象とした。

【結果及考察】臨床的には咳1例、血痰1例、過呼吸1例、無症状2例で、内1例のみ腫瘍マーカーの値は正常範囲を上回っていたが、全例に炎症反応は認められなかった。ツ反は4例で陽性をみた。胸部X線及CT像では肺野孤立性陰影は辺縁不整な結節影を呈しTBBの標本上では2例に器質化病巣が認められ、3例が非特異的気管支肺胞組織であった。しかし、全例肺癌を否定できないため、その後開胸術が施行され病理組織学的に器質化肺炎と診断された。今回、肺野孤立性陰影において画像的に限局型器質化肺炎と肺癌との相違は明らかではなかった。当院の同時期における肺野孤立性陰影に対するTBBで器質化病巣が認められた10例中1例(10%)が肺癌であったことから限局型器質化肺炎と診断する上でやはり肺癌との鑑別に慎重な臨床的判断を要すると考えられた。

P-174 肺癌肝転移に対して皮下埋め込式リザーバー

から動注化学療法を施行した症例の検討

—肝動注の意義、目的、投与量について—

昭和大学藤が丘病院呼吸器内科

○廿楽 裕、秋澤孝則、倉石 博、菊池敏樹、植島葉子
金子教宏、山田峰彦、大塚英彦、成島道昭、鈴木 一

【目的】肝動脈リザーバーから間欠的化学療法を施行した肺癌肝転移2症例を経験した。肝動注の意義、目的、抗癌剤の量、種類について検討した。

【症例1】66歳、女性、肺小細胞癌肝転移の再発、カナブテン、シタラチンによる全身的化学療法でPRとなったが、Grade4の消化器症状のため継続が不可能となった。外来での治療の希望が強く、原発はコントロールされており、肝動注化学療法を開始した。カナブテン、シタラチンを外来で可能な量として5分の1量の各20mgを2週間間隔で開始、骨髄抑制や消化器症状をみながら各40mgまで増量し5ヵ月間外来通院中である。

【症例2】71歳男性、肺小細胞癌再発、肝転移に対し全身的化学療法を1クール施行するも肝転移増大した。局所コントロールのため肝動注を開始、早急な肝転移縮小、全身的な効果を期待し、全身的化学療法の3分の2を投与した。肝転移巣は著明に縮小したが4クール終了後、骨髄抑制のため治療不能となり、肝動注開始後、102日後死亡した。

【考案】肝動注により症例1では、在宅期間の延長、症例2では肝不全死からの救命が可能であった。動注量は、目的により症例毎に検討する必要があると考えられた。

P-176 限局性腫瘍陰影を呈する原発性肺癌をどのよう

にして診断したか

自治医科大学呼吸器内科¹、同胸部外科²

加藤知子¹、石井芳樹¹、北村 諭¹、蘇原泰則²

【目的】限局性腫瘍陰影を呈する原発性肺癌の診断において気管支鏡の有用性について検討するため、気管支鏡検査で診断し得た症例とし得なかった症例を比較した。

【対象】当科で胸腔鏡による診断が積極的に行われるようになった1993年1月から1995年12月までに当科を受診し、胸部X線写真にて限局性腫瘍陰影を指摘された症例308例中原発性肺癌と診断された169例を対象とした。

【結果】169例中、気管支鏡検査で診断された症例は140例(82.8%)で腫瘍の長径の平均は42±20mm、気管支鏡以外の手段で診断された症例は、29例(17.2%)で腫瘍の長径の平均は33±17mmであった。気管支鏡検査で診断できなかった症例は、腺癌が17例、扁平上皮癌が5例、大細胞癌が5例、小細胞癌が2例であり、腫瘍の局在は縦隔側に存在するものと胸膜直下のものが多く、また長径の大きな腫瘍でも診断不可能な症例もあった。最終的に他の検査で診断された症例では、気管支鏡検査を3回反復した症例が3例、2回が6例であった。これらのうち、13例は外科で開胸術、胸腔鏡下肺生検を施行した。さらに気管支鏡検査で診断できた症例と腫瘍の特徴を比較検討した。